

回想法ってなんだろう？ 文化財建造物と高齢者ケアのかかりついでこんなことだろうか？ もちろん、あまり聞き慣れていない言葉であり、珍しい関係といえます。

回想法とは、高齢者の記憶、特に誰しもが鮮明に覚えている子どものころの記憶を思い起こし、語り合うことにより楽しい時を過ごし、それが高齢者ケア、さらには痴呆や閉じこもりの予防になるという心理療法です。一九六〇年代にアメリカの精神科医が提唱した手法で、日本でも多くの研究事業が進められ注目されています。

師勝町では、平成一四年度から「思い出ふれあい事業」と題して地域の高齢者ケア、介護予防事業に回想法を展開しています。その契機、拠点となったのが、歴史民俗資料館と国登録有形文化財の旧加藤家住宅で、全国に先駆けて実践してきました。

師勝町歴史民俗資料館では、昭和時代の生活資料の収集に力を注いでいます。本館が開館した平成二年には、埋蔵文化財と民俗資料の展示が主体でしたが、平成五年から昭和時代の資料収集を始め、その後、展示フロアはすべて昭和三〇年代という明確な方向性を出してきました。現在は、「昭和日常博物館」とも呼ばれる顔を前面に出しています。会場で聞かれる来館者の声は、「懐かしい」に終始し、なかでも高齢者が自

「思い出ふれあい事業」の展開 高齢者ケアと文化財の活用

らの言葉で笑顔とともに自らを語る場所にもなっています。

一方、旧加藤家住宅には、明治時代から昭和戦前期の暮らしが今もなお息づき、主屋を中心に長屋門、離れ・茶室、土蔵、高塀、中門の六棟が登録されています。

回想法を行う際、環境が高齢者にとってさわめて重要な意味をもちます。昔から使った慣れた物や雰囲気があれば高齢者の心理面に良い安定を与えます。

こうした博物館資料や文化財建造物を土台として、国立長寿医療センターの遠藤英俊医師を中心に、作業療法士、保健師、学芸員が参画して、博物館と福祉と医療が連携した介護予防事業の取組が具現化しまし

た。旧加藤家住宅の敷地内に設立された「師勝町回想法センター」は、回想法の拠点として、定期的に回想法のグループワークを開催し、また、学術、研究、研修の場として有効に活用されています。

文化財としての建造物と介護予防事業としての拠点である回想法センターが融合し、思い出をさらに効果的に呼び覚ます場所となりました。

高齢者の記憶をきっかけとし、高齢者に社会参加、学習の機会、心理面でケアを提供する回想法は、今後、博物館や文化財建造物の活用を考えるといく上で重要な役割を果たしていくと思われます。

(師勝町歴史民俗資料館学芸員 市橋芳則)



旧加藤家住宅主屋全景（登録有形文化財）



師勝町歴史民俗資料館の展示風景



師勝町回想法センター全景